

の成佛（五念行成就）は他力に縁つて果遂せられ、他力は衆生の成佛に縁つて成就せられる道理、すなわち「若非佛力四十八願便是徒設」の意であつて「略論」九右の「其實、非度、非不度」の句が注意される。従つて「言他力者如來本願力」となる。

以上の如くである時、覈求其本釋は先輩の説の如く、速得成就阿耨多羅三藐三菩提の速得についての釋であるには違ひないが、直接には衆生の成佛が既に本願の上に約束されているという事であるという意趣を強調するのが覈求其本釋の直接の意味ではなからうか。速得の因縁とはそういう意味であらう。そして速得の二字を曇鸞は七地沈空の難なきことの意味に解したと思われる。それは(一)「論註」の初めに「十住論」を引き「淨土論」は易行道開顯の書であるとしているが、「十住論」における易行道は二乘地に墮する即ち七地沈空の難を怖れたところに開かれた易行道である。(二)下巻二十右以下において淨土には七地沈空の難なき故に上地の菩薩と畢竟して身等しく法等しきを得る。龍樹や天親が淨土を願生したのもこの爲であらうと述べられてゐるからである。云いかえると、七地沈空の難のないことが速得成就ということであり、「何の因縁あつてか」という問に答えるのが、他力増上縁であることとなる。かく見る時「淨土論」を以つて易行道開顯の書であり、上行の極致不退之風航者也とした曇鸞の素意がより説明に理解されると思う。

ところで、この巻末の速得成就についての問答に於て、問は「論」の所述について何の因縁あつてか速得なるやと問うたのに對し、答は「論」文をそのままにして「論」に五門の行を修し

て以つて自利々他成就するが故にと言えり」として速得の因縁は何も答えられていない。このことは既に論主が能令速満足功德大寶海と速満足を教示せられてゐるからという意趣であらうが、この問答からして曇鸞の論主天親の教説に絶対歸依の心情が伺われ、よき人の仰せに隨うのみであるという心境が汲みとられると思ふのである。かくて曇鸞は天親に導かれ、天親は龍樹に、龍樹は釋尊にと直接に導かれるのは佛説の傳統者であつて、上巻末八番問答における下々品の者が善知識に導かれる相である。「覈に其の本を求むれば」の本の字は、かかる意味から考へるとき、遠く廣い種々應化の傳統を包攝してゐるのである。

註 ①「往生論註講要」九六頁、

善導の六字釋について

藤原幸章

善導の六字釋は周知の如く觀經下下品十聲稱佛の上に願行具足必得往生の道理を明らかにしたものである。それ故に善導に つながる法然系の人々は齊しくこれに注目したのであつて、宗祖においてもより例外ではなく先學亦これが研鑽に心血を注いだのであつた。然るにこうした先學の領解は當然のことながら先づこの疏文の嚴密な加點邦讀から出發しかくして愈々その本義の顯彰に努めたのであつた。所でこの場合そのきめてとなるべき宗祖自身の讀法が一般には殆んど知られていなかつた

ために、この疏文中特有十願十行具足の七字に對して可能な限りの讀法を試みたのであつた。即ち①有^チ十願^ニ十行具足^ス ②有^リ十願^ニ十行具足^ス ③有^チ十願^ニ十行具足^ス との三種がこれである。而してこの中祖意に契當した適正な讀法として傳統的に尊重してきたものは③のそれであつて、このことはかの香月院師や長圓寺本並びに南條本の七祖聖教が一致してこれを採用している事實によつて明瞭である。蓋しこの讀法は所謂法體大行説に根據するものであつて、それは概念的説明的には一應の利便を得たものといえる。けれども善導疏文の上にはどこにも法體大行という如き表現はもとより、その思想すらみられず、ここでは専ら本願相應ということによつてすべてが支えられている。としたならば上述の傳統的な讀法は必ずしも適正とはいえないものがある。ここに於いて注目せられるものが宗祖自身の讀法である。これには現在次の如き資料がある。

- (一) 有^チ十願^ニ十行具足^ス (觀經集註—眞蹟加點)
 - (二) 十願ありて十行具足す (曆應本選擇集延書—宗祖加點本
による延書本の轉寫)
 - (三) 十願ありて十行具足す (貞和本選擇集延書—宗祖加點本
と對校した延書本の轉寫)
 - (四) 有^チ十願^ニ十行具足^ス (西方指南抄—宗祖眞蹟寫傳)
 - (五) 十願十行具足せり (正元本選擇延書—宗祖寫傳本の轉寫)
 - (六) 有^リ十願^ニ十行具足^ス (宗祖加點五部九卷—傳眞蹟)
- これによれば宗祖においても先學の試みた三加點が一應々々採用せられてゐる如くであるが、この中宗祖独自の識見を表わすと見られるものは(一)(三)(四)の讀法である。即ち(一)は何よりも先

づ嚴密な意味における宗祖眞蹟加點の讀法であり、(二)(三)また宗祖加點本に基く延書のそれであつていわば眞蹟加點に準ずるものと認められるからである。(四)も同じく眞蹟ではあるが、それは法然の原文の寫傳再録であり、(五)は宗祖寫傳本の轉寫である。従つて、(四)の如き宗祖の朱筆による返點が加えられていても、やはりそれは原文の忠實な再録に止るものとみてよく、現に廬山寺もそのように讀まれている。(六)については書誌學的に多少の疑問があるから今は論外とする。

かくして上記六文中、正しく宗祖會心の讀法とみられるものは(一)(三)(四)のそれであるといつていいであらう。これは單に眞蹟加點に基くのみならず、思想的にも敢て概念的形而上的な法體大行説を要とすることなく、念佛往生の本願そのものに相應して大願大行を具する、それ故に善導の疏意に契當した最も妥當な讀法である。善導の主張が根本的に本願爲宗に立脚し、宗祖また選擇本願を本質として六字釋義を領解せられてゐる事實を思うべきである。まことに本願を信じ念佛申すより外に眞宗はない。然るにこの宗祖會心の讀法は皮肉にも傳統的には長きに亙つて否定し來つたところである。われわれはいま改めてその錯りにおもいをいたすべきである。

六字釋の周邊

藤元正樹

六字釋は、六字の解釋である。解釋とは、自らを解體し、そ